

巻 頭 言

時間生物学の未来

石田 直理雄

産総研 生物機能 生物時計
筑波大学 生命環境 連携大学院

時間生物学会も12回を数えた。12という数字は東洋（干支）や西洋（12ヶ月）を問わず区切りのよい時期である。ショウジョウバエ*period* 変異株の発見は1971年であるが、13年後の1984年に全遺伝子配列が明らかとなる。さらに、その13年後（1997年）にヒトを含む哺乳類にその相同遺伝子がある事がようやく明らかとなる。これらの基礎研究を元にヒトの睡眠リズム障害に時計遺伝子産物が関与する事も最近明らかとなり、一般社会でもその重要性が認識され始めた。この間の本学会の世界への貢献は“世界のオタク”として恐れられてきた。

しかし、これら時計遺伝子の情報を癌や糖尿病予防や治療に使うのか、単にその人の睡眠傾向等の予言のみに使うのかは我々科学者の良心の問題である。幸いにも時間生物学会は基礎と臨床の人間が、会員の半分ずつという世にも珍しい学会である。是非共本学会を両者の交流の場として活用していただければ幸いである。

最近の科学の専門家・細分化は進む一方で、社会の科学に対する不安感はこれに連動している。このような時期に一般社会に対する科学者の説明責任は重く、遺伝子から行動や環境・社会までを扱う真の学際領域である時間生物学の役割は大きいと考えられる。時間生物学が単なる知識の伝達に留まらず、より良い持続可能な平和で健康な社会への知恵を提供する学問となる事を願って巻頭言としたい。